濁水かわら版

第 89 号　2019 年 8 月 30 日

ボケ防止を兼ねて　中安 宏規

日本の戦争　24

中庵少尉の太平洋戦争 ㊦

前回の第 88 号に続き、46 歳 2 か月で応召した中庵少尉の第 39 戦車連隊の復員までを記します。

❶ 絵 5 は、39 戦車連隊の巴村での陣地造りを描いている。日付は 20/8 月。何時始まったかは不明だが、“絵になる”ような状況で筆を取ったと思われる。下の図Aは戦争末期の推移。45/6/30 日、花岡鉱山で重労働に耐えかねた中国人が蜂起し多数の死者が出た。7/10 日の米機動部隊発見は、陸軍偵察機の報告を高松日記からの引用。7/16 日、米は原爆実験に成功していた。その頃、奈良時代の大仏建立のような人力戦で築壕に汗を流していたのだ。

❷ 図Bは巴村の位置。水戸から南へ約 20km。鹿島灘から 7～8kmの現鉾田市と推定した。陣地構築は、完成を待たず終わったと考えられる。

❸ 長崎に原爆投下の 8/9 日 23 時半、皇居防空壕で御前会議が開かれた。出席は鈴木首相。→次頁

絵⑤

図B

図A	戦争末期～敗戦の主な状況　Ⅱ
月日	1945 年 6 月～9 月の推移
6/30	秋田・花岡鉱山で中国人徴用工が暴動
7/10	空母 12 の米機動部隊が房総沖集結を発見
7/16	米、ニューメキシコで原爆実験に成功
7/17	米・英・ソ、ポツダム会談開催
7/26	ポツダム宣言を発表
7/28	鈴木首相、ポ宣言黙殺・戦争邁進を語る
8/～	第 39 戦車連隊、巴村で陣地の築壕作業
8/06	広島に原爆投下
8/08	ソ連、対日戦争を開始
8/09	長崎に原爆投下→深夜の御前会議　↓
8/10	午前 2 時半、国体護持を条件にポ宣言受諾
8/12	連合国、天皇に触れず降伏条件を回答
8/14	御前会議ポ宣言を受諾。天皇終戦の詔を録音
8/15	正午、玉音放送。鈴木内閣総辞職。
8/17	東久邇宮（皇族）内閣成立
8/24	第 39 戦車連隊、中台に集結→8/26 復員会食
8/30	マッカーサー元帥、厚木飛行場着
9/02	米艦ミズーリ号上で降伏文書に調印
9/06	米軍、東京に進駐
9/14	第 39 戦車連隊、復員式の分列行進→復員
9/27	天皇、マッカーサーを訪問

天皇「九十九里浜の築城出来ていない」（深夜の午前会議で）

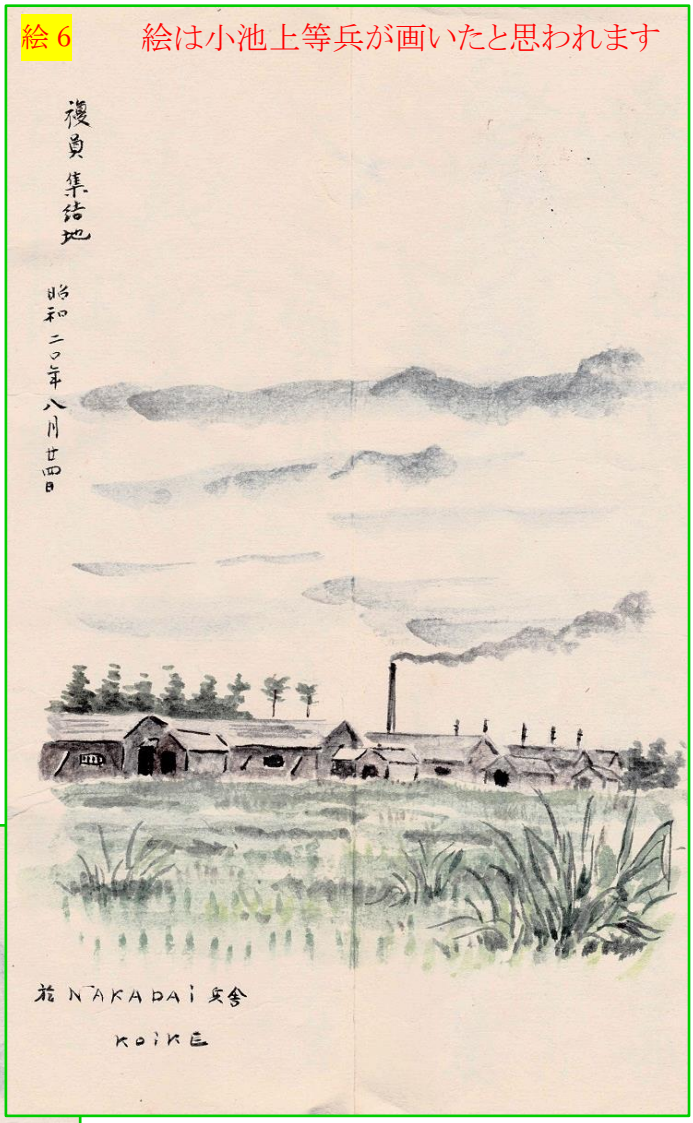
前頁から）東郷外相・米内海相・阿南陸相・梅津陸軍参謀総長・豊田海軍軍令部長・平沼枢密院議長の 7 名。首相が議長を務め、外相提案のポツダム宣言受諾案を審議した。氏名青文字はポ宣言受諾（平沼議長は条件付き）。赤文字は反対の本土決戦派。意見が 3 対 3 で分かれ、首相は賛否を言わず聖断（天皇の意見）を仰いだ。

❹ 天皇は外相案に賛成し、次のように述べた。「従来、勝利獲得の自信ありと聞いて居るが、今迄計画と実行とが一致しない。又陸軍大臣の言う所に依れば九十九里浜の築城が 8 月中旬に出来上がるとのことであったが、未だ出来上がっていない（注 1）。また新設師団が出来ても、これに渡すべき兵器は整って居ないとのことだ（注 2）。これでは、あの機械力誇る米英軍に対し勝算の見込みなし…」（外務省編「終戦秘録」）。

注①「昭和天皇独白録」では梅津参謀総長から、注②は同、阿南陸相から聞いたと記している。

❺ 絵⑤の巴村陣地構築は、九十九里浜の ↘

絵 6　絵は小池上等兵が画いたと思われます



絵 7

北に隣接する鹿島灘からの米軍上陸を食い止めるためだ。前号で書いた中庵少尉の「戦車 2 台」の話が、小隊でなく中隊の話と小子が考えたのも、御前会議で軍の最高幹部が、天皇にまで偽りの報告していたことが判明したからだ。

❻ 絵 6 は敗戦 10 日後、各地に散っていた第 39 戦車連隊が鯉渕村の中台兵舎（現水戸市・88 号地図C参照）に集結した。集結地を「於 NAKADAI 兵舎」。サインは koike。図Eの折帖に「不滅神州」と記した小池上等兵と考える。敗戦後の兵舎をローマ字で記したのだろう。

❼ 絵 7 は、集結 2 日後の「復員部隊会食」の風景だ。前方のテーブルは将校であろう。原図で数えると約 30 名。兵隊は 1 列 30 名でざっと 1000 名になる。第 88 号❻で触れた軽戦車中隊の定員が約 330 名。中戦車中隊が約 350 名から、絵の風景は 3 中隊規模になる。第 39 戦車連隊の記録が見つからず、あくまで絵からの推測だ。 →次頁

律義な復員式

❽ 絵8は、敗戦 1 か月後の 9/14 日（注：88 号❺の「9 月 13 日復員」は誤りで訂正します」）に行われた「復員式分列行進」。これが最後の水彩画だ。兵士らは、はやる帰郷の心を抑え、占領軍の指示や兵舎の掃除・原状復帰などに日々を過ごしたと推測している。この絵には、予備・後備役らの家庭持ちと思われる兵たちの律義さを感じる。

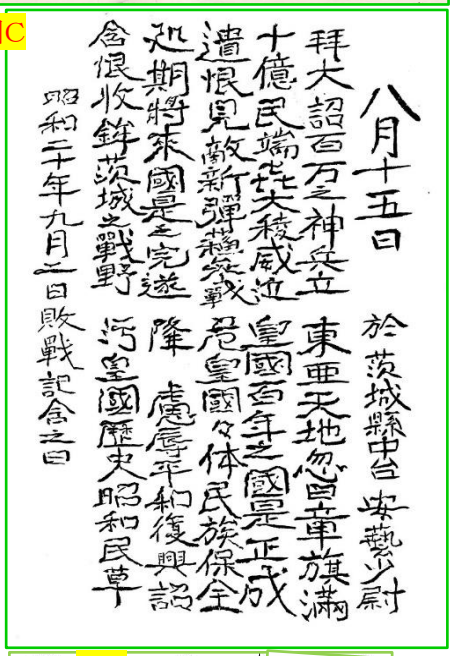
絵8

敗戦の心境

❾ 図Cは、絵8の次のページに載る「八月十五日」と題した 1 行 9 文字の漢詩である。諸橋轍治「大漢和辞典」によれば、中国の魏の時代に始まった「九言詩（くごんし）」。左は自己流の読下し文。筆者「安芸少尉」は広島（安芸国（あきのくに））生まれの中庵少尉のペンネームらしい。青字の「大御陵威（おおみいつ）」は天皇の権威。原文では「御」が欠落。「新弾」は原爆、「蘇」はソ連だろう。「九月二日」は戦艦ミズーリ号上の降伏文書調印の日。隷書風の文字を含め、美文達筆と言えないが、敗戦当時の心境を伝えているように思われる。

❿ 図Dは、中庵少尉の軍歴。明治大学法科専門部（3 年）卒後、徴兵義務に 1 年志願兵で入隊。歩兵 2 等卒から下士官の曹長を経て少尉に昇進した。大正 14/7/29 日、将校詮衡（せんこう）会議に合格し 8/01 日歩兵曹長で召集解除。その後、勤務演習などを務め昭和 3（1928）/3/31 日、29 歳で少尉に昇進。同年結婚。青春を徴兵制度に縛られた厳しさを感じる。

図C

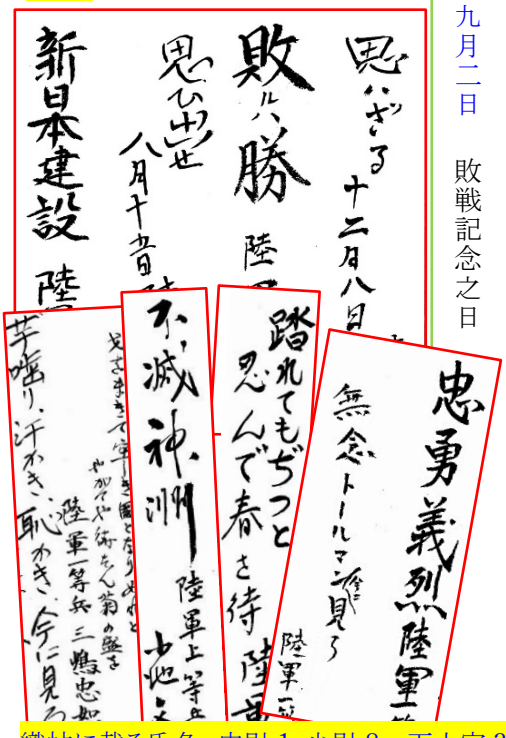


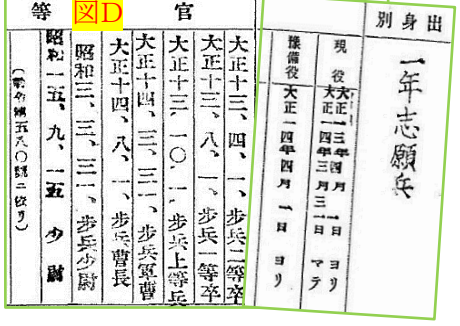
八月十五日　　於　茨城県中台　安芸少尉

大詔を拝し百万之神兵立つ　　東亜の天地忽ち日章旗に満つ
十億の民端喜び大御陵威に泣く　　皇国百年の国是正に成らんとするに
遺恨を見る敵新弾蘇参戦　　危うき皇国の国体と民族の保全
処に将来を期し国是之完遂　　辱を思慮ながら平和復興の詔降る
恨みを含み鉾収める茨城の戦野　　皇国の歴史を汚した昭和の民草

昭和二十年九月二日　敗戦記念之日

図 E 兵隊の敗戦記



織帖に載る氏名　中尉 1・少尉 8 ・下士官 34・兵隊 144　計 187 名

図D